

「学内外における学生主体の建築活動（教育・研究・実践）」

北陸支部長：桜井康宏、シンポジウム委員長：富樫豊

1. はじめに

学会支部大会の活性化の一環として「若い方々のエネルギーを何とか結集し大きな力にする」ことを目的として2003年より支部大会の目玉企画である「学生によるシンポジオン」を実施している。そこでは、学生を主人公にしてフランクな発表の場を提供することによりエネルギーを増殖させようという考えで企画運営している。今回は11チームの参加があり、構造、計画、教育、街づくりなどの分野で会場参加者全員によるディスカッションを楽しんだ。ここでは、各チームの取り組みと討議内容・感想(すべて学生直筆)を記す。

2. 概要とプログラム

会場：福井大学総合研究棟I、13階大会議室

日時：2006年7月9日、13:00-15:30

発表学生：北陸地区の大学・高専、計11チーム

参加者：発表学生含めてデスカッサーは90人

プログラム：13:00-13:05 主旨説明

13:05-14:00 発表、6分/チーム、計11チーム。

14:05-15:00 自由討議：聴衆が各チームテーブルに出向き自由に

15:00-15:20 各チームまとめ1分/チーム、全体のまとめ



上；自由討議風景 下；各チームによるまとめのスピーチ



3. 各グループの発表と討議

3.1 信州善光寺とその周辺の伝統的建造物群に関する調査研究：長崎真也、山崎政希(信州大、大学院生)



<プレゼン> 研究室の学生総動員で現在行っている善光寺周辺の伝統的建造物群に関する調査(善光寺の境内の変容や宿坊の増築の方向性)について発表した。

<討議> 善光寺について知識をもった方や、興味を示す方が多く、予想以上の盛り上がりだったことに驚いた。また、他大

学の学生活動の発表には同じ学生としてかなり刺激を受けた。

討議では、現在調査対象になっていない建物がまだあることやまちづくりの観点での意見をいただいた。また善光寺参拝ルート駐車場の位置についても議論した。建物調査が問題解決の第一歩であると感じた。

3.2 松本深志神社舞台の修復工事に関する調査研究 ：新川竜悠、福島幸宏(信州大、大学院生)

<プレゼン> 「松本市重要有形民俗文化財」に指定されている、松本深志神社の全16台の山車(山車)について、地元の方々と学生の協働で修復した。

<討議> 松本市以外の多くの山車の事例や、今後の調査の進め方について貴重な示唆を頂いた。また多くの学生が能動的に活動している姿をかいま見ることができ、すごく刺激を受けた。学生が携わることの意味、学生だからこそできることについて考えさせられた。

3.3 地場産杉を使用したインテリア・家具の提案 ：廣瀬ゆかり、上田祐章子、北川一登(富山大、学生)

<プレゼン> 富山県産の間伐材を使ったインテリア・家具の木工製品を持参した。特に木のしなりの性質を利用した木製座布団は自信作である。

<感想> 自分たちと同じテーマに取り組んでいた「ベンチ製作」については、私たちとは全く違う方向から杉間伐材に取り組んでいる作品を見ることができ勉強になった。

<討議> 他大学の先生や学生の方と意見や情報を交わした。自分たちの作品にも、予想外に興味をもってもらって大変嬉しかった。他大学の方々の研究も面白そうなものばかりであった。

3.4,5 石川高専におけるベンチ制作ワークショップ、 ：本田祐一郎、折坂智美(石川高専、学生)



<プレゼン> 間伐材を使って制作したベンチについて説明した。

<討議> 木がもつそのままの味の良さなどの助言を頂いた。

<感想> 大学生の力強さや行動力に圧倒されたことである。大学生が何をしているのかを知らなかったのが、今日の発表や自由討議ではカルチャーショックを受けた。それ以上になんて楽しそうに活動しているんだと思った。また沢山の先生方にも見てもらえる機会をいただけたことに感謝し、自分たちの存在を伝えることもできた。

3.5 石川高専ゲートハウス計画：折坂智美、南さくら、上野実由紀(石川高専、学生)

<プレゼン> 石川高専創立40周年記念事業として校門脇にある守衛室の改装を行った。これを「石川高専の顔となるような多目的展示空間」として、学生および教職員を対象に学内コンペを実施し、最優秀賞の案を基に計画が進んだ。基本設計および実施設計はコンペ入賞者を中心とした「Gatehouse Lab (学生8人、教員研究員2人)」が行った。上記Labでは、模型製作やディテールの検討、業者打ち合わせにまで学生主体で取り組み、先生方には学校側との橋渡しという形で協力いただいた。コンペ公示から僅か半年という短期間で設計から工事まで全てが完了し、06年4月10日に竣工した。今年度から本校5学科がローテーションで学科独自企画の展示・プレゼンをゲートハウスにて行う予定である。

<討議> Q. ゲートハウス・プロジェクトを進めるにあたって、学校側あるいは設計チームの中で衝突などは起きなかったのか？ A. 学校側とは設計者とクライアントの関係であるため多少意見の食い違いはあったが、話し合いを重ねお互いに妥協もしながら進めた。設計チーム内で衝突はなかったが、十分話し合っただけで納得しながら進めていった。Q. ゲートハウスの運営はこの先、学生が行っていくのか？ A. 学校側が管理・運営を行っているのが現状であり、学生による運営の目処は立っていない。**<コメント>** こういったプロジェクトを実行する学校側の行動力もすばらしく、設計期間も半年と短く大変な苦労があったのではないのでしょうか。(by 葉袋奈美子、福井大)

3.6 伝統木造軸組の耐震性能評価について

：村西進也、春山聡子 (金沢工大、大学院生)



<プレゼン> 第一に伝統木造軸組構である東本願寺御影堂を対象にした構造調査と対象建物の構造模型について、第二に伝統木造軸組のほぞ差接合部の解析モデルについて説明した。

<討議> Q. 1/50の東本願寺御影堂の模型をもっと多くの人にアピールした方がいいのでは。A. 現在は、製作途中であるため公表してはませんが、完成後は東本願寺に飾ってもらう。Q. 模型には桔木の部分が入っていないが、実際はあるのか？ A. 実際に桔木はある。修復工事を行う中で徐々に桔木周辺部の詳細がわかりつつあるが、今後作成を予定。Q. 東本願寺御影堂でも同様に解析はするのか。A. 部材数が非常に多く、不確定なところも多いため解析は容易ではない。そのため解析有無は検討中。

<感想> 自分たちの研究も比較的學生メインでやっているが、それ以上に他大学の活動が學生主体であることを知った。

3.7 雑木林を楽しむ会の活動を通して：青木敦司、馬場麻衣 (福井大、大学院生)

<プレゼン> 福井大学の南東に位置する0.37haの小さな林

(雑木林)を地域で共有する事を目的に、様々なイベントを通して、地域の方との繋がりを深めて取り組んでいる。

<感想> 学生の活動というものは、外に対して発信する機会になかなか恵まれない。活動というものは、自分達の中で確信を持って、活動を貫くことも可能ではある。しかし、やはり周囲に発信し、反応を感じ、そこから新たな確信を抱いて活動を行うことが学生自身にも必要になってくる。誰かに背中を押してもらえることは、何よりも励み・自信になる。そうした意味でこのような学生の発表の場はとても貴重である。実際に今回も、他大学の先生方・学生さんとの交流を通し、先生方からは励みとなる声を頂いた。また学生のみなさんからは、活動の悩みや刺激、称賛などを頂き、同じ立場で行動するもの同士で、何か共有できるものが得られた。このような交流を通して得られたものが、現在や今後の活動の後押しになっていくと思う。

3.8 Fukui Play-Studio 遊房

：村野泰弘、宮原知紗、池上茂雄 (福井大、大学院)

<プレゼン> 子どもが本能のままに遊べる場である「Fkui Play-Studio 遊房」にて種々のイベントを企画・実施している。

<主張> 遊房の話をするといつも教育学部の学生に間違われるが、実際は遊房の現メンバーはほとんどが建築を学ぶ学生である。僕たちは「建築とは空間づくりであって、人間づくりでもある」と思い、豊かな空間をつくるには豊かな人間が必要であり、そのためには豊かな教育・遊びが必要である。今日のドミノを並べているみんなの笑顔は素敵であった。笑顔は楽しい空間をつくり、それが豊かな生活・空間をつくるということを皆さんに伝えることができている。うれい。

3.9 福井市田原町商店街におけるまちづくり実践活動

：朝倉卓也、田中翔太 (福井大、大学院生)

<プレゼン> 田原町地域の「住民主体のまちづくり」として、ご近所の底力で時代の流れに沿った「住みよいまち」を目指して会議やイベントを開催している。

<コメント> 福井市田原町商店街におけるまちづくり実践については、全国的に問題を抱えている商店街の活性化を目的として、学生ならではの斬新な発想と行動力で関係の人たちを、まさに巻き込み活力を取り戻しつつあるのではないかと思う (by 村田一也、石川高専) ;

3.10 福井大学建築2年プレゼンツ(ベンチ、オブジェで大学を楽しく)：中谷扶美子、小石川嘉朝、白倉公隆、辻裕介(福井大)

<プレゼン> 学部二年生の授業で、何かを作ろうということで、大学を楽しくさせるベンチとオブジェをつくった。

3.11 ふくいエキマエ七夕祭り：木村仁司、竹橋佑記(福井工大、大学院生)

<概要> 06年7月7日・8日、福井駅前のみなみ通りにおいて商店街との協同で七夕祭りを開催した。7日は幼稚園・保育所・小学校・障害者福祉施設子どもたち3,000名の短冊を70本の笹に飾り、また当日通りの一般客のうち2,000名余りに短冊を取り付けていただいた。8日の夜は、歴史的要所である柴田神社の神主による短冊全てのお焚き上げによってみんなの願いを天に昇らせた。

4. まとめ

今回のシンポジオンでは、各学校の垣根を多少なりとも取り払うことができ、支部における様々な学生の主体的な活動を知ることができた。また今回も大人は学生諸君から大きなエネルギーをいただいた。全体をまとめると；

①研究者(大人)は、日頃研究室の中で「論文」をつくることに埋没しがちであるが、今回の発表から「ものづくり」「体験」「実践」ということの大切さと楽しさを改めて感じる事ができた。

②日本全体が目標喪失とか先行き不透明とかいわれて久しいが、今回の発表から、伝統・技術・文化・自然（とくに木）といった日本の「良さ」を見直し、保存し、あるいは新たな可能性や発展につなげようという点に学生諸君の関心があるように感じると同時に、その重要性を改めて考えさせられた。

③なによりも学生が大人と対等に渡り合い自信を深めたばかりか、学生間の討議により他大学等学生との刺激を受けあっており、自ら見つめ直す事も出来たものといえる。

○ 今後の進め方について、学生諸君からは是非とも意見を出していただき、まさに学生主体の活動として続いていくことを期待している。「個性」「連携」が今後も「継続」して発展していくように互いに頑張りたい。その第一歩として、参加した学生の皆さんには、今日の経験を後輩に伝えて引き継いでいていただきたい。